

紙上講座Ⅳ

二世 十返舎一九のこと (3)

講師 藤井 実さん (東町花輪)

江戸にでた糸井武、通称鳳助は、戯作者大田南畝(蜀山人)・十返舎一九・為永春水、浮世絵師蹄齋北馬らの門をくぐった。

紀山人、花輪堂、赤城子、瀧糸丈(大田南畝・蜀山人命名)、春興、梅園、十字亭三九(十返舎命名)、二世十返舎一九、登仙笑咎人(為永命名)どの雅号を持った。

ここで、鳳助が二七歳のとき「十字亭三九」を名のつた時の「三九」の名付け親であり師匠である十返舎一九(以下一九と記す)のことに触れてみる。

一九といえば『東海道中膝栗毛』(以下膝栗毛と記す)、『膝栗毛』といえば「弥次さん 喜多さん」。一九の代表作である。

一九は明和六年(一七六五)、今

の静岡市で武士の子として生まれた。

一九が『膝栗毛』を世に出したのが享和二年(一八〇二)、三七歳の時。以来二十一年間にわたって出版され、今日もまだなを多くの出版社から発行し続けられている。

一九は寛政七年(一七九五)から文化二年(一八〇五)の十二年間に百五十五編、生涯では五百をこえる作品を発表。絵も文も上手く、江戸時代多くの作品を世に出した。

当時の作家は、他に商売をしながら作品を書く、いわば兼業作家がほとんどであった。

一九は、作品の原稿料だけで生計をたてられた江戸後期の最大人気作家であった。

この一九に、入門(別説に再入門)し、「三九」という雅号を付けられたのが「二七歳」というが、いつの頃だったのか。

天保四年(一八三三)春、鳳助が二世十返舎一九を号す時に出版した『仇競今様櫛 三編中之巻』の跋文(あとがき)に、四方正木が鳳助(二世十返舎一九)を次のように紹介している。

※「本書第一編」は鳳助が紀山人と号す時の文政一三年・天保元年(一八三〇)に出版している。

※『仇競今様櫛』の文中には、鳳助の生まれ育った故郷に關係するような人物名や地名がちりばめられている。

・尾池小路・萩原屋梅太郎
・大畑村
・黒河
・小夜戸孫一・糸吉
・八木原
・深沢の里

※『勢多郡東村誌』にも記載

今の十返舎先生は、東武台麓に住す。上毛州黒河の里の産。姓は糸井、名は武。

始め 東曲調を能し、故蜀山翁より送らる、雅名滝糸丈と呼ばれしが、後春興と改め、号を梅園といふ。

蹄齋先醒に随ひては、画筆に一風の妙をあらはす。

紀山人、また花輪堂。赤城子の諸号あり。

ひとは、一回は教訓亭の舍盟に遊びて。数十部著述に妙案を尽し。

※教訓亭(為永春水)は江戸後期の戯作人情本の代表作家

其後前の十返舎重田一九老人、十字亭の別号をおくられ、

今の先生、其時の年才によりて、三九とは号られし也。

今の先生二七歳のとき前の老人考へられて三九子とは名づけられたり(中略)

四方正木による鳳助の紹介文には「年」が述べられていない。

鳳助が「二世十返舎一九」として紹介された『仇競今様櫛』(三編からなる)の序文から出版年と作者名を探ってみる。

「第一編」の出版は文政一三年・天保元年(一八三〇)。作の鳳助の号は「紀山人」名。

「第三編」の出版は文政四年(一八三三)。作の鳳助の号は「二世十返舎一九」名。

「第二編」の出版はというと、『仇競今様櫛』『第二編』の序文に自らを「紀山人改め二代目十返舎一九誌」とある。

※「誌」は書きしるすの意

「初代一九」は天保二年(一八三一)八月に没する、師匠「初代一九」存命中に鳳助が「二世一九」を名のるとはおもえない。

「第二編」の出版は、初代一九が亡くなった後の天保二年(一八三一)八月以降であり、「二世一九」を名のったのも同じ時

期と考えるのが妥当だろう。

※『群馬県氏姓家系大辞典』

も、鳳助が二世十返舎一九を名のったのが、天保二年(一八三一)と記している。

さて、鳳助が「二世一九」を名のる前「三九(鳳助二七歳)」を号したのはいつのことか。

「三九」の作品『魁梅枝曾我』の「序」から推測してみる。

この書の「序」に「文政十一(一八二七)春脱稿」「文政十二春新版」「版者十字亭のあるじ糸井三九」とある。

※「脱稿」は原稿の書き始め、

「新版」は売り出しのこと

※文政十一年(一八二七)以前は、短い間だったが為永春水門下にいた。

『童子訓どうしくんいろは短歌』の出版は天保三年(一八三二)初春。作の鳳助の号は「十字亭三九」。

※鳳助が「三九」を名のったのは『魁』では文政十一年

(一八二七)。「二世」を名のったのは『大辞典』では天保二年(一八三一)とある。

※「二世」襲名後も『童子訓』によると「三九」名を使っていたことになる。

鳳助が「三九」を名のったのが「文政十一年(一八二七)」とするならば、この年が「二七歳」なのだろうか。

すると、鳳助の生誕は、寛政十二年(一八〇〇)前後か。

また、鳳助が江戸に出た年齢が『勢多郡誌』にいう「二十歳前後」ならば、文政三年(一八二〇)前後に江戸に向かったのか。

鳳助「二世十返舎一九」は天保から文政にかけ約二〇編を著し、「安政元年(一八五五)頃に没したと云う(『勢多郡誌』)」。享年五六の生涯か。

鳳助は板刻の平仮名木活字をつくり、戯作を著すにも応用し

図書印刷に大きな影響を与えた。

鳳助は寛政十二年(一八〇〇)頃生まれ、文政三年(一八二〇)頃に花輪をたつて江戸に向かった。

※江戸では大田南畝(蜀山人)

や為永春水、十返舎一九らの江戸一と言われる人々の指導を受けた。

鳳助二七歳、文政十一年(一八二七)三九と名し、天保二年(一八三一)には「二世十返舎一九」を継いだ。

そこには、江戸文化を運んできた銅山街道や上州文化の拠点のひとつ大間々文化人の存在があったことは間違いない。

加えて、黒川峡の谷間「花輪」にも江戸の文化を受け鳳助を育んだ素地があったことを忘れてはならない。

《江戸中期》
天和・安永1681-1780
《江戸後期》
安永年間1772-1781
天明年間1781-1789
寛政年間1789-1801
享和年間1801-1804
文化年間1804-1818
文政年間1818-1830
天保年間1830-1844
弘化年間1844-1848
※江戸時代区分諸説